術と道

身体で知る武の思想

光岡英稔
×
中井祐樹

新泉社

はじめに

総合格闘技の時代。今の状況をそう言い切ってしまっても差し支えないかと思います。私たちもその成立と発展にわずかながら寄与した「夢」の格闘技が、競技レベル、経済規模ともに未曾有の領域に達した現状を目の当たりにし、素直に驚嘆しています。

トップクラスの実力者であっても勝つことが容易ではなくなるほどのレベルの向上、ファイトマネーの高騰。プロボクシングやプロレスといった既存のメジャーなマーケットからも常にパートナーシップを求められ、スポーツ界のみならず政財界や芸能界からも多数のセレブリティが観戦やサポーターとして集まる場となりました。

かつて、プロ野球、ラグビー、フットボール、大相撲、柔道、レスリングなど、ナショナルレベルの選手やオリンピックメダリストが集まるのはプロレス界の専売特許でした。しかし、今やそれらに加え、ボクシング、空手、キックボクシングの世界で頂点を極めた選手までもが、こぞって総合格闘技界に参入してくるようになりました。市場として、稼げる場所として魅力的なのでしょう。本当に感嘆するばかりです。

私は長らくこの世界に身を置き、浮き沈みを見てきました。バイオレンスすぎると批判されたこともありましたが、時代を切り抜けてきました。おそらく、総合格闘技はもう消滅することはないでしょう。その浸透ぶりを肌で感じています。

しかし、格闘技はこのままで良いのでしょうか。この十年ほど、誇らしさと共に、そうした疑問も抱くようになりました。方向性の画一化が顕著であること、ドーピング問題など公平性や社会的な立ち位置の揺らぎ、曖昧さ。技術的・心理的な深層を掘り下げることの重要性と、それを商業ベースで語る難しさ。先行き不透明な部分も増大しています。

そんな模索の日々の中で、武術家の光岡英稔先生といつしか知り合うことになりました。光岡先生は、私には想像もつかないレベルで思考し、修練を積まれてきた方です。先見性があり、いつも対話をさせていただくたびに感服するばかりです。先生の著作も、共著を含めすべて読ませていただきましたが、今回対談のお話をいただいたものの、雑談ならいざ知らず果たして対等な会話になるのか、正直不安で一杯でした。

その成果がここに示されています。私としても初心者に戻った気持ちで自分をぶつけてみて、素直になれたかなという気持ちがあります。私は正直なところ、武術、ひいては武道とは何か、その意義は何なのか、わからなくなるときが今なお少なからずあるのです。いつまで経っても、表面的な勝ち負け、強い弱い、効いた効かない、決まった決まらない、にこだわっている未熟者に過ぎません。でも今はそれでもいいじゃないか。そこから前を向こう、と思っています。そんな思いを光岡先生にぶつけてみたところ、温かく包み込んでいただいたような、そんな心境です。

いまや多くの格闘技選手が、セカンドキャリアとして技術を家業にして生きていこうとする時代。曲がりなりにもその先鞭をつけた人間としての責務として、より広く世の中との関わり方を見据えていかねばなりません。

人を叩き、投げ伏せ、抑えつけてマイッタを言わせる。そんな技術を追求してきた者が、果たして社会に何を示せるのか。そう考えた時、武術や武道としての側面を帯びてくるのは自然な流れでしょう。では、我々はその方向性をどう考えていけば良いのか。

YouTubeや動画配信サイト等で、気軽に格闘技を見られる今だからこそ、格闘技が好きな人だけではなく、万人の頭の片隅にでも置いてもらいたい、そんな話が咲き乱れました。ぜひお楽しみください。

二〇二五年一月

中井祐樹

術と道——身体で知る武の思想⊙目次

はじめに　中井祐樹　3

第一章「武」を考える——13

「武」が提供できるものとは　17
武道、武術、格闘技の違い　23
「総合」という考え方　30
弱い人間が勝つためには　35
武術の原風景　38
相撲と身体感覚　42
触れ合うこと、感性、コミュニケーション　47
組み技系と打撃系の文化の違い　51
コンテンツの娯楽性と武術　53
負けたら相手に学べばいい　56

第二章　学ぶこと、教えること——63

UWFの衝撃　66
優等生、シューティング部を作る　70
自分で考えるスタイルの原点　73
北大柔道部からシューティングへ　76
見えない将来　80
組み技時代の到来　83
死闘の背景　86
負けると思っていない、勝つと思うからやった　89
ブラジリアン柔術への挑戦　93
選手から指導者へ　99
自前の柔術を作る　104

第三章　感覚の世界——111

暗黙の道場訓　113
影響をうけた本　116

背筋が凍る異次元の蹴り　119
ハワイでの稽古の日々　123
韓氏意拳との出会い　126
ガチをしかける　127
背中がついても終わりじゃない　129
古流柔術とプロレス　132
鏡のない時代の身体感覚　147
基本とは何か　152
死ぬまで練習していいよ　158

第四章　死生観を考える　167

一九九〇年代の総合格闘技界　169
エンセン井上の「楽しい柔術」　174
真剣勝負のおもしろさを伝える　180
攻防技術の変化　183
ブラジリアン柔術を基礎におく理由　188
体を動かせる喜びと豊かな世界　192
一度死んだ身　197
僕はずっとバカにされてきた　200
総合が文化の簒奪を起こしている？　203
教えることの難しさ　207

第五章　これからの社会と武道　215

外部に生命の持続を委託しない　219
人生は時間無制限の勝負　222
負けないことに強い日本人　227
絶対的に不利な状況でどうするか　230
格闘技は怖いもの？　237
やりやすさに向かわない　241
強くなる方法は人の数だけある　243

「相手の知らない技術で勝つ」弱さ　246
完成することのない総合格闘技という「道」　250
運動を通じて成長する子供たち　252
他者を敬うということ　254
誰もやらないことは言わないといけない　258

おわりに　光岡英稔　267
解説　稀有な、御二方の対談に寄せて　甲野善紀　277

本文写真　春日玄（26頁、184頁、186頁、209頁、235頁、265頁、266頁）
写真提供　甲斐毅彦（57頁）
著者（15頁、170頁、217頁、248頁）

第一章「武」を考える

光岡　中井先生にお見せしたい写真がありまして、これ覚えていらっしゃいますかね。

中井　おお、なんとこれは私じゃないですか！　いつの写真ですか？

光岡　たぶん一九九九年くらいです。中井先生が池袋の極真会館の道場でブラジリアン柔術を指導されていた時期で、見学に行かせてもらった時に記念に一緒に撮っていただきました。

中井　なんと、そうでしたか！　それにしてもこの頃は柔道着を着ていますね。ちょっとブカブカだ。

光岡　たしかハワイのバレット・ヨシダ[*1]が日本で活躍し始めていた頃でした。ＢＪ・ペン[*2]がまだ有名になる前で、「ハワイにはバレットよりも恐らく強い人間がいて、これから出てくるはずです」といったような話をした覚えがあります。その後にＢＪがブラジリアン柔術の世界選手権で外国人として初めて優勝し、その後にＵＦＣ（アルティメット・ファイティング・チャンピオンシップ）のチャンピオンになりました。

中井　懐かしいですね。その頃はハワイに住まれていたんですよね。ということは、この時期は一時帰国されていたんですか？

光岡　はい。それでいろいろなところに出稽古みたいなことをしてまして、当時は日本ではＰＲＩＤＥで桜庭和志さんなど日本人選手も活躍し始めていた頃でした。総合格闘技ブームの影響でいろいろな道場が日本でもできていて、見学や出稽古をさせてもらうために各地を回っていたんです。

中井　そうでしたか。

光岡　すべてがそういうわけではないのですが、高田道場[*3]みたいにプロ選手がいる団体は、「そういう人は別に練習していて」みたいな感じで、プロの

選手は一般と分かれていて相手はしてくれませんでした。昔のプロレスも多分そうでしょうけど、一流選手はお客さんの相手はせずに下の人にさせるみたいな感じです。

中井　僕にはプロ選手だけの練習という発想はないんですよね。練習は練習なんで。プロだから特別なことをするとは、まったく考えたことがないんです。誰だって別に負けたいわけじゃないし、やり込められたいわけじゃない。となると、やることは一般の人も同じですよね。これが僕の変わらない感覚なんですよ。

光岡　確かに競技である限り最終的に行き着く先は〝どう勝つか〟ですから、プロもアマも別に変わりませんよね。

中井　だけど「プロ練をなんでやらないんですか？」と聞かれるんですよ。いや、プロだって普通の練習に参加すればいいじゃないですかと思うわけです。「一見（いちげん）さんお断り」というのは僕の性分じゃないんですよね。とはいえ、わかりますよ。他の人が、一般の人が混ざってしまったらレベルとして物足りない。「ちょっとな」と思うのは感覚としてはわかるんです。けど、僕の中にそれはないんですよ。北海道大学柔道部出身だからでしょうかね。素人と一緒のところにいさせるっていうか。素人をないがしろにしないっていうのかな。理由はわかりませんが、私自身が素人から始まってるっていうのも大いに関係してそうです。

光岡　中井師範の場合は高専柔道[*4]の流れを汲む七帝柔道[*5]が背景にあるということですね。そのあたりの話も今回じっくり聞かせていただければと思います。

「武」が提供できるものとは

中井　はい。まず僕の方から光岡先生に聞いてみたいと思ったのは、「『武』がこれからの時代に提供できることはなんなのか？」ということでして、ものすごく大きなテーマではあります。

　僕は「武」に理解がない。というよりわかっていない。わかっていないんだけど、僕自身がもしかしたらそこに向かう可能性がなくはないと思っているんです。若い時は「武道」という言葉は使わなかったし、「武道にあってスポーツにないものなんてひとつもねえよ」って言ったこともありますし。でも今はむしろ武道と言わないと通じない人もいっぱいいるし、格闘技と言っていたら競技から出られない。だったら「道」にするしかないという思いはあるんです。

光岡　武術界ならびに武道界の現状は、正直いうと支離滅裂（しりめつれつ）で玉石混交（ぎょくせきこんこう）がひどすぎる状態ではあります。